

## 夢に挑戦する相産づくりを目指して

校訓「誠実」「創造」「努力」

平成22年8月6日(金)



○1日に1回は校舎内外を周り部活動の先生方・生徒に声をかけたいと思うのですが、結構この夏に出張が集中しており、その分、書類の整理や先生方との打ち合わせに時間がかかっているのが現状です。8月4日は野球部が1日強化練習をしており、真っ黒に日焼けした生徒を前に見ながら、顧



問の先生方と生徒の状況、試合の状況等の話を聞かせていただきました。その後、体育館に入ったのですが、剣道部が木刀を使って防御即攻撃の練習をしていました。体育館2階フロアではバドミントン部とバレーボール部が練習していました。バレー部は男女各7名の部員で、ネットの高さを一方は男子レベル、他方は女子レベルにして練習していました。男女合同で練習するための工夫が光っていました。

○日本教育新聞「人づくり国づくり～出会い編」（8月2日・9日付）に今回は山口和歌山県教育長が掲載されていました。先日は大西兵庫県教育長でしたが、この出会い編は人の生き様を浮き彫りにしており、私はいつも楽しみに読んでいます。山口教育長の人生には常に誰かに助けられるという“人の縁”によって、この世を生きてこられた感を強く持ちました。

- ① 幼い頃に体が弱く、進駐軍によるペニシリンで助かった。その後、何度も急性肺炎を起こして命の危機に見舞われた。
- ② 祖父が体力を付けるようにと、町の道場で柔道を習わせた。
- ③ 絵を描くことが好きだったので中学校・高校は柔道やらないつもりだったのに、どちらも声をかけられて入部した。
- ④ 大学時代、関節リュウマチのために柔道ができなくなり退学するところを、主任の教授の配慮で前例のない教育学部に転学した。
- ⑤ 大学時代、たまたま社会教育主事の資格を得ていたために、卒業後すぐ、教育委員会に勤

務した。

⑥ その後、高校の校長を経験したあと、現職についている。

人の出会いに助けられて、大きく生きておられる姿に感銘を受けました。

【私が少年創作童話を書きました。NO. 036～037に分割して連載します。】

### 『少年・勇（ゆう）の挑戦～惑星ケンタウルスを救え』NO1

天馬（てんま）勇（ゆう）はどちらかというと気弱な小学3年生。役所に勤めているお父さん・清一と家にお母さん・静香の愛情を一杯に受けて育ってきた一人っ子。少しわがまま。

8月のある日のこと。そんな勇が、学校のプールが終わって昼御飯を食べに走って帰っている途中のことである。いつも勇が遊んでいる「はとぼっぼ公園」で、不思議な生き物を見かけた。その生き物は公園のベンチのはしっこに人間が腰掛けるようにしてちょこっと座っていた。大きさは勇がいつも持っているスヌーピーの絵のついたスイミングの小型バッグくらいで、顔は可愛らしい子犬のような顔していた。耳は兎のように大きく、ピンと立っていて、全身金色の短い毛で覆われていた。尾っぽはなく、後ろ足を伸ばして組んで、その上の足に両手を合わせて置いていた。目が大きくて、ルビーのように輝いていた。

勇は「あれ、なんだろう。こんなもの見たことがない。」と思い、ゆっくりベンチに近づくと、その生き物は急に跳び上がり、ユーカリの大きな木の茂みの中に隠れてしまった。勇は何とも言えない不思議な気持ちになったが、そのまま家に帰って、食事の時、お母さんにそのことを話した。お母さんは「変わった色の鳩を見間違えたんじゃない。」「あとで、お父さんに図鑑で調べてもらい。」と言った。

夜、勇はお父さんに公園の生き物のことを尋ねたが分からなかった。

夕食後、宿題を済ませて、9時ごろ2階のベッドのある部屋で寝ようとしていた時のことである。ガラス戸をたたくものがあるのが、薄いカーテン越しに見えた。よく見るとそれは昼間見たあの生き物であった。勇はびっくりしたが、子犬のようなかわいい顔をしていたので、別に怖いとも思わず、窓を開けた。

窓から入ってきた生き物は、そのルビーのような大きな目を輝かせてこう言った。

「私の名前はヒカリ。初めまして。」

勇はこの不思議な生き物が言葉を話すことに驚きながら、

「僕は勇。初めまして。」

と挨拶を返した。

「なぜ、言葉がしゃべれるの？君は何者なの？」と勇。

「私は今、あなたの心に直接話しかけているのよ。私は第四惑星のケンタウルスから来た者よ。公園で勇に会った時、あなたこそ私たちケンタウルスを救える人だと思ったの。今、私たちの惑星ケンタウルスは中心星セネガの軸の乱れで、爆発しそうになっているの。」

「爆発しそうだって？」

「中心星セネガは、地球との関係で言えば、太陽のようなものよ。私たちの惑星ケンタウルスは中心星セネガの周りを、バランスを保ちながらまわっていたの。本当に人々は平和な楽しい生活をしてたわ。それが、ある原因でそのバランスが狂ってしまったの。」

「何が原因なの？」

「それは、8年前に新惑星が発見されて、その新惑星に宇宙エネルギーのオクトンが沢山あることが分かったの。」

「それで。」勇は先が聞きたくて仕方がなかった。

「でも、その新惑星のおかげで、惑星間に戦争が絶え間なくなったの。みんな、その新惑星を独り占めにしがっていたのよ。そして、他の惑星を支配しようとしたの。その戦争で使ったミサイルや宇宙戦艦の爆発のために、それぞれの惑星軸が乱れてしまい、中心星セネガと惑星間とのバランスが崩れてしまったのよ。その上、中心星セネガの軸も狂ってしまったの。このままではセネガ銀河星雲は大爆発してしまうのよ。」

「誰かその戦争を止められる人はいないの？」

「いるわ。」

「それは誰？」

「それは私たちの第四惑星の賢者ナータンよ。」

「ナータンによって、助かるんだね？」

「ええ、そのはずだったのよ。でも、そこからはナータンに直接聞いて欲しいの。ただ、分かっていることは、あなたしか全惑星を救える可能性のある人はいない、ということだけよ。」

「どうやってナータンに会えるの？」

「それは簡単よ。さあ私の手につかまって。」

勇がヒカリの小さな手につかまったかと思うと、ヒカリの体が宙に浮き、ヒカリ全体が輝きだした。その光が勇の体を徐々に包みだした。包み終わったかと思うと、もうその景色は一変した。ヒカリは勇の肩に乗って耳元でささやいた。

「これが賢者ナータンの家よ。」

勇はびっくりした。なぜなら、偉い人なので宇宙要塞のような大きな家に住んでいるのかと思っていたのに、その家は継ぎ目のない蓮のつぼみのような小さな家で、近くの多くの家と全く変わらず、薄いクリームホワイト色の壁で囲まれていた。家の前に近づくと、ドアが自動的に開いた。賢者ナータンは丸いテーブルに向かって書きものをしていた。

「地球の子・勇と一緒に参りました。」      <次号に続く>